

ロンドン高層住宅火災の 原因は可燃性外装材



安藤氏

JAEIセミナーで東大・安藤氏

昨年6月にイギリス・ロンドンで発生した、外断熱改修された高層住宅の大規模火災は、可燃性の外装材が被害を大きくした。去る2月21日に札幌市内で行われたNPO日本外断熱協会（略称JAEI、堀内正純理事長）の北海道支部セミナー「外断熱建物の耐火防火！日本の外断熱は安全か！」で、東京大学学術支援職員の安藤達夫氏が講演し、ロンドンの高層住宅火災で被害が拡大したのは、当初使われるはずではなかった可燃性の外装材に大きな原因があるとの見解を示した。

「英国高層公営住宅火災に関する最新情報」と題して講演した安藤氏は、外断熱で改修されていたロンドンの高層住宅火災について、「この火災は夜中に発生した後、屋内ではいったん鎮火したが、外に吹き出た火が外装材に付いて上方に燃え広がったと推定される。改修設計時の外装材は防火認定を取得

した3mm厚の亜鉛積層パネルとなっていたが、実際に施工されていたのは可燃性のポリエチレンを金属面材で挟んだACM（アルミ・コンポジット・マテリアル）外装材で、この外装材に燃え移った火が最上階まで燃え広がり、外装材裏面の通気層を伝って発泡樹脂系の外断熱材にも着火した可能性が高い。外装材が設計時と施工時ですり替わっていたのが最大の問題で、通常ではありえない火災だった」と解説。

また、「日本ではまだ同様の火災が起こってはいないが、外断熱建物の外装材に規制がない以上、危険性は皆無と言えない。外断熱建築物に関連する業界の方々には、外壁の燃え広がりを評価・検証するJIS A 1310の試験方法で火災安全性を確認するなどして、安全な外断熱外装システムの普及を図って頂きたい」と、国内の外断熱建築物についてさらなる安全性向上を訴えた。